あとがき

CVAという考え方がある。CVA（コンテクスチュアル・バリュー・アッデッド）とは，イギリスの教育水準局が，2005年から取り入れるようになった学校評価のための指標の一つである。それは，「状況的付加価値」という意味で使われているようである。児童生徒の学力を統一テストの点数だけで一律に評価しようというものではなく，子どもたち一人一人をよく見て捉え，どのぐらい努力して，どれぐらい学力が伸びたかを細かく把握しようという発想で作られた画期的な指標である。

具体的に言えば，中等学校入学時（11歳）の学力に，その子どもの性差や民族，母語，収入などの社会経済的な要因を加味して数値化する形を取る。イギリスの教育水準局は，それまでの形骸化した点数化やランキングを見直さなければ，特に運営が困難な学校が立ち直れないと判断した。CVAを導入するなどして，真の学校評価・教育評価をし，実質的な支援に力を入れようと，改革に乗り出したのである。

2007年３月31日の読売新聞「教育ルネサンス　イングランド報告（5）　学校変える進歩の指標」に，イングランド中央部にある英国陶器のふるさと，ストーク・オン・トレント市のロングトン・ハイスクール（中等学校）のことが取り上げられたのは記憶に新しい。同校は，2001年の前回監査では４段階中最低の結果で，最も厳しい改善勧告を受けたとのこと。以後，必死になって改革に取り組んだという。

やがて全国テストの中等学校修了試験に，一人一人の子どもの伸びを公平に示すCVAと呼ばれる指標が導入された。同校は１段階上の評価になっただけであったが，「ゆっくりと向上している」と認められたのは，教員に大いなる喜びをもたらした。

早速，子どもたちの視野を広げ，学習意欲を刺激しようと，同校では，教科横断型の授業や，芸術家を招いてドラマの要素を入れた歴史や科学の授業を展開するなど，工夫を続けた。結果，全国テストの成績も向上していった。社会的に不利な環境にありながら，努力をしている学校は，正当な評価を得にくい。

同じ点数が出たとしても，もともと成績のいい子どもの多い学校と，そうでない学校では，教員の努力の差は大きい。英語を母語としない移民の子が多いと，師弟ともによりたくさんの努力がいる。そうした不公平を考慮し，努力を正当に評価しようというのがCVAであったのだ。

私は，この報告を読んだとき，初等教育学科としても，目の前の幼児や児童を，CVAのような指標で捉えていく研究ができないものか，と心底より思った。初教版CVAの開発。個人的には，性差や民族・母語・収入などの社会経済的な要因を加味するといったイギリス流の考え方をそのまま取り入れるのではなく，私たちなりに，例えば，子どもの生育暦や学習暦をデータ化するような方法を開発するのがいいのではないかと感じている。そのような指標そのものの研究や実践につなげていく研究は，誰よりも私たち教員や学生が元気の出る仕事になるのではなかろうか。結果的に，私たちがこれから接する子どもたちや保護者にも，大いに喜んでもらえることになるだろう。

それは小さな一つの案にすぎないが，この『初等教育学入門』をまとめ終えた今，初等教育学科として，広島文教女子大学教育学会として，次の一歩を，さらにその次の一歩を踏み出したいと願わずにはいられない。

初等教育学科長　岡　利道